

ジョイント・フォーラムがリスク合算モデルの改善を提言

2010年10月21日

ジョイント・フォーラムは、本日、「リスク合算モデルの発展」(原題: Developments in Modelling Risk Aggregation)と題する報告書を公表した。この報告書は、リスクを合算するために、複合的な金融機関によって現在使用されているモデル手法の改善を提言している。また、特に世界的な金融危機に照らして、金融機関のリスク合算モデルの使用に対する監督当局の対応についても検証している。

ジョイント・フォーラムの議長及びオーストラリア証券投資委員会の議長であるトニー・ダロワジオ (Tony D'Alosio) 氏は、「この報告書は、リスク合算手法のより効果的な使用方法を検討している金融機関にとって、また、金融機関の用いる手法の欠点を察知するため、金融機関によるリスク合算モデルの使用への理解を深めたいと考えている監督当局にとって、欠かせない資料となっている。」と発言した。

主な結論

- 現在使用されているモデルは、最近、進歩がみられるが、そのモデルを利用して行う機能や意思決定の全てを支援するには適したものとなっていない。これらのモデルを使用する金融機関は、テール事象を含め、自身が直面するリスクを十分に理解していない可能性がある。
- テール事象への対応など、これらの諸問題への対応は金融機関によって区々である。
- 金融機関は、リスク合算のモデル化にあたり、データの量や質の管理、計算結果の適切な伝達など、様々な実務的課題に直面している。こうした課題にも拘わらず、リスク合算過程をどのように管理すべきかを根本的に見直し・再検討しようとする金融機関側の姿勢はほとんどみられない、というのがジョイント・フォーラムの認識である。
- 監督当局は、現在金融機関によって使用されている合算モデルは概ね「発展途上の段階」で、ベストプラクティスは未だ確立されていないと考え、

監督当局としての責務を果たすにあたって、通常、それらのモデルに依存していない。監督当局が、監督目的で、それらのモデルの利用に信頼を寄せるに至るまでには、異なるリスク間の合算等の面で、手法の大幅な改善が必要である。

主な提言

- 金融機関は、リスク合算手法の目的や機能に応じて、モデルを見直すことなどによって、リスク合算手法を改善していくべきである。そうした改善は、金融機関が自身の直面するリスクをより良く理解することを手助けするであろう。
- リスクの識別やモニタリングを目的としてモデルを使用する場合、金融機関は、モデルが十分にリスク感応的で、きめ細かく、柔軟かつ明瞭であることを確保すべきである。資本の充実度や支払い能力を測る目的で使用されるモデルについては、テール事象をより良く反映するよう改善されていくべきである。
- 監督当局は、現在の合算過程や手法を継続的に使用することによって生じるリスクを認識すべきである。監督当局は、意思決定とリスク管理の改善に向けて、合算モデルが適切に調整され、正しく機能することの便益を強調しつつ、監督当局としての懸念事項を金融機関に伝達していくことが求められる。監督当局は、金融機関と共に、これらの改善に向けて取り組んでいくべきである。

レポート全文

本報告書は、国際決済銀行（BIS）(<http://www.bis.org>)、証券監督者国際機構（IOSCO）(<http://www.iosco.org>)及び保険監督者国際機構（IAIS）(<http://www.iaisweb.org>)のウェブサイトから入手可能。

ジョイント・フォーラムについて

ジョイント・フォーラムは、金融コングロマリットの規制を始め、銀行、証券、保険の各分野に共通な諸問題に対処することを目的に、1996年にバーゼル銀行監督委員会（BCBS）、証券監督者国際機構（IOSCO）及び保険監督者国際機構（IAIS）の後援により設立された。ジョイント・フォーラムは、銀行、証券、保険の各分野を代表する主要な監督者で構成されている。